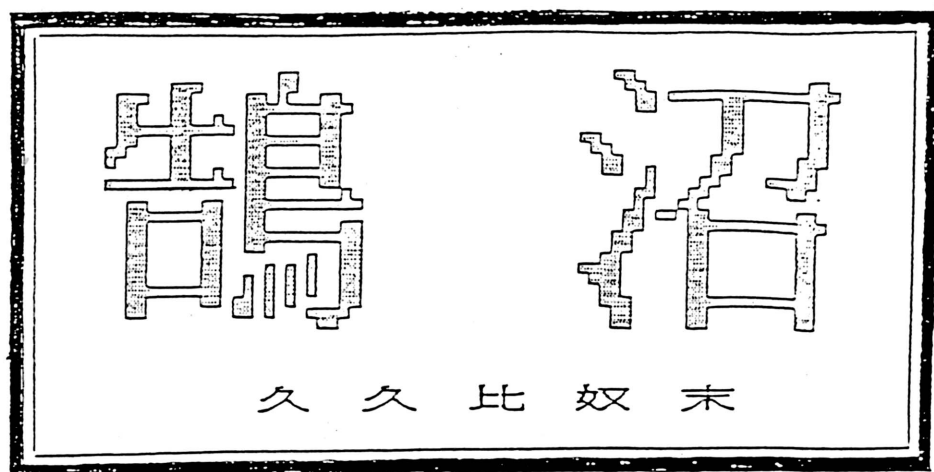




はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 5 1 号

1 9 9 0 年 1 月 9 日

よかったなあ、あの時代は 今井達夫

鵜沼の鵜生園 田中まさ子

鵜沼を語る会・秋の懇親会田中まさ子

鵜 沼 を 語 る 会

久米正雄は感慨ぶかく鶴沼を語った

しかし、劉生とはここでまたしばらく別れて、「白樺派」以外のひとたちに登場してもらおう。新潮社の中村武羅夫（小説家）が鶴沼へ移って来たのも、劉生と同じ胸の病気を療養するのが目的だったが、彼も幸い結核ではなかった。しかし、いくらか健康をそこねていたので、毎日外気を吸うため釣をたのしむのを習慣にした。その釣場は海に近い堀割で、本村を通して来る水田用の水がたまったものらしく、すぐ近くを流れている引地川とつづいていて、上汐ときにはたくさんのイナが背をそろえて海からのぼって来るのを見ることができた。

武羅夫の釣場は「鶴沼の白橋」のすこし上にあった。この橋を「鶴沼の白橋」と名付けのは洋画家の裕伊之助で、そういう題をつけて二科展に出品したので有名になったからである。せまく短かい、白いペンキが塗ってあるその橋は、洋画家たちの食欲をそそったとみえ、岸田劉生も横堀角次郎とカンバスヲ並べている。武羅夫がそこに釣場をきめたのは彼の住居から三分ぐらいで来られるからであった。彼の家は引地川を見下ろす川縁にあって、藁屋根の小さな家の庭には幾羽かの雛が放し飼いになっていた。（中略）新進作家というべきか流行作家と呼ぶべきかむしろ人気作家と呼ぶべきか彼に興味の目を向けたのである。久米は快調にしゃべり、武羅夫の重苦しい哲人めいた姿勢とは対照的な人柄を見せていた。私が三田文科にいと知ると、小島政二郎とか南部修太郎とか井汲清治とか、三田派の作家評論家たちの名前を挙げて私が固くなるのを気遣ってくれた、その印象は彼の死去にいたるまで具えた人柄である

鵠沼では人気者だった

「カクさん」横堀角次郎のひょうきんさ

中屋旅館にいた横堀角次郎と丸山行雄のふたりの洋画家は、共に岸田劉生の弟子で「草土社」の出品者であった。八軒別荘の椿貞雄とともに劉生の鵠沼移転に及ぼした鵠沼住人である。横堀はその後劉生が「草土社」を解散「春陽会」創立とともに春陽会へ移り、現在にいたるまでその長老として活躍している。丸山の方はのちに哲水と号する陶芸家に転じたが、鵠沼在住中は小学校の教師になり、震災前に結婚、この海岸町を去った。

横堀は上州生まれのひょうきんな気質の持主で、たくさんの逸話を残している人物である。横堀とは私の所属する二十七日会（のちに出て来るまで説明はしまっておく）の関係で戦後もしばしば逢う機会を持ったが、大正10年ごろの逸話を紹介しよう。彼が小学校の教科書の表紙をクニサダ教科書と読んだという笑い話は、出身地が上州であるためのつくり話であることはつまり彼のひょうきんな気質を誇張して伝えようとする弥次馬の思いつきであることは明らかである。いかに彼がうっかり者であるにせよ「国定」教科書を忠次親分に結びつけてしか考えられないとは誰も信じないであろう。しかし、信じないひとたちもこのつくり話をおもしろがるところに横堀角次郎の面目があるといえる。

次は実話である。たびたび出て来る引地川は鵠沼本村と辻堂を区切って流れているが、海へそそぐあたりは砂浜を通っているのも、水かさの加減で流れがいろいろに変わったものだ。現在は護岸工事もあってそんなことはないが、そういう変化のあるせいで木橋などかけても役に立た

ない。一夜にして橋は砂地に取り残されてしまう、場合もしばしばあった。だから、木橋をかけるのは、夏の避暑客たちが海水浴場へ渡る便宜のための設備で私達はそのお蔭で遠回りをしないですんでいた。話はその橋を渡る時のことである。

鵠沼住居の後半、劉生が歌舞伎に凝ったことは「絵日記」の中に明らかだが、その影響によったのであろうか、横堀はその橋を渡るとき花道に見立てて見得を切って見せるのであった。そのころの鵠沼海水浴場の客はきわめて数がすくなく、たいがいその属性を知り姓名を知り合うほどであった。私達は現在でも横堀を「角さん」と愛称で呼ぶことが多いがその「角さん」が橋の上で六方を踏み目を剥いて見得を切ると浜辺の見物衆達は一斉に拍手を送る。「角さん」はそれが嬉しいとみえ、芝居心は中屋へもどり着いてもつついているのであった。台所に近い井戸で水をかぶりながら昼の食事の用意にとりがっている女中たちに向っていうセリフがいい。「コレサ、女房、飯はまだか。余は空腹じゃぞ。腹がへっては戦はできぬ」

告鳥沼の告鳥生園

田 中 ま さ 子

鵠生園のことは、馬込時代から親しくしていた作家の今井達夫さんが、晩年お世話になっていたの、話には聞いていた。このあたりは、広い東屋と地続きであつた矢張り広い中屋旅館の屋敷跡で、この旅館の一室で吉屋信子が少女画報へ、花物語りや連載ものや他の作品を書かれていたという。私はこの作家のものは好きで、作品はいつも女の味方であつたから、よく読んだ。隣の東屋は有名な流行作家がたえず泊まりに来て、とても賑わつたという。

さて、私は年々足腰の痛みが増して、老化は進み、なんとか自分で手足が動かせるまにとりハビリを思いつた。遠くの病院へも行つてみたが、家を離れるのが心もとなくて長くは続かなかつた。老いゆく日々「終生医療を考えない」と言つたら、それはウソになる。こんな冷えた社会生活の中で、誰が介護に当たってくれるだろうか。昔のように大勢の家族に見守られて、自分の家で旅立つ幸せは望むべくもないようだ。

色々考えて、手続きをして、初めて鵠生園を訪れた。建物は外から見るとより広く明るく綺麗だった。職員の方もみなやさしく、親切だった。デイサービスの仲間に入れてもらつた。来ている方達も明るく、私などより重いお年寄り方も車椅子で話しかけて下さる。その中から突然はずんだ声がした。「あっ、思い出した。よし樹ちゃんのお母さんだ。」とこれは驚きだった。今から五十二年前、子供の入学式の日から、父兄会、運動会などで、いつも顔を合わせていた浅沼さん。私達は声なく抱き合つた。生きていたのね、と今の鵠沼小学校（当時、藤沢第三国民学校といつた）それからの思い出はつきない。同級生はみなエラクなつたこと。名前も忘れたが、前田和甫ちゃん、長谷川襄二ちゃん、玉木さん、あっそうだ、下級生の中に藤沢市長さんが入つていた。葉山さんのお母さんは、きれいな人で、当時珍しい洋服姿で、二人の小さなお子さん（市長さんの弟さんたち）にお揃いの洋服を着せて、いつも父兄席にかけて居られた。目玉のくりっとした可愛らしい峻ちゃんはかなり腕白ちゃんだった。私達は海岸駅から通う子供に付き添つて、田圃や畑の中の小学校の校庭の隅で、元気な土地っ子にひ弱なわが子が苛められるかと、ハラハラして見守

っていた。当時、土地っ子の方が多かった。今のPTAのお母さんよりも私達は小うるさい存在だったことだらう。しかし、いま考えると、あの頃の小学校教育は、完璧だったと思う。引き売りに来る農家の子供さんのお母さんはいつも言っていた。「奥さんたちはヒマでいいよね。あたし達は子供と遊んでやるなんてこと勘定の中にへえっちやぁいないだよ。」と、別荘の子供が出来るのは当たり前だという。がちがう！あの頃の教師の方々には、本当に頭が下がる思いである。若さの情熱は純粹だった。別荘の子も、農家の子もまた、韓国の子にも、実に公平に教えて手間ひま惜しなかった。

私と浅沼さんは、感謝しながら、園の昼食を頂いた。栄養士さんの行き届いた気くばりでいつもおいしく頂くことが出来る。今日はデザートに桃が出た。これ鵜沼の桃かしらと聞いたら、山梨の桃だという。なるほど、もう鵜沼には桃畑は見当たらない。桃といえば堀川から海岸へかけて一面桃畑だった。電車で藤沢の方から来ると、桃畑の中から尼寺さんの屋根が見えた。野菜と一緒に、桃や太白というさつま芋が甘く、いつも引き売りのおかみさんから買った。こんなに鵜沼に長く住み、地元の人達と仲良く小学校の行事に参加してよい思い出ばかりが残った。感謝の他ない。

八月五日、今日は鵜生園の十五周年記念日である。付添いがいるというので、私の家人が都合が悪く、塩沢さんに電話でお願いした。塩沢会長さんはご迷惑だったらしいが、一日付き合って下さった。職員の方はみんな出て、お祭りを盛り上げて私達老人を楽しませて下さった。屋台が出て、生ビール（あわだけ）、やきとり、たこやきなど食べて色々な遊びもあった。

老いを治すことは出来ない。楽しく保つことは出来る。戦前戦後の二つの昭和時代を生きてきた。価値観の差、移り変わりの激しい中によい人情を残していきたいと思う。

おわり

「鵠沼を語る会」秋の懇親会

田中まさ子

平成元年も、あと一ヶ月で終る、11月14日公民館に集った。

この集りは土地の素朴な、お人よしの楽しい人達が運営されて、十年余となる。

文学、植物、宗教、経済とみなそれ々に見識を持っておられる、方々である。

さて今日の議題は会の主な一年間歩み、「3月10－12日鵠沼懐古展」鵠沼公民館遠くは千葉県君津市、宇都宮市からも来場された。入場者3,500名

4月15日史跡見学会、宮ヶ瀬ダムと伊勢原日向薬師御本尊開扉、大法要。」

「7月4日川崎市立日本民家園見学。」

10月28－29日鵠沼公民館まつり「ふるさと民芸家屋と山草展」協力山田春夫さん（鵠沼海岸3丁目）と湘南山草会民芸傘等塩沢さん、カカシは御所見の宮地さん、ススキ狩り19日の強い風雨の中を片瀬山え館長さん、中村、吉田さんご苦労様でした。又、ススキ壁面造りは榛葉さん立派に出来上り役者揃いでした。入場者2,098名（会長報告）

よく出来た茅葺の民家と山草マッチして暖かい夢を人々にあたえてくれた。これを作られた方々のご苦労は大変なものであったろう。

会長さんが四国行脚にゆかれて、1人だけ先に後生を願ってツルイ。お土産にキビ団子と純金茶を一同に下さり、いつもの美味しい、お弁当を戴きながら、お話は盛り上がった。

お元気でいっも会に顔を見せていた、岩田さんが湘南大平台病院（旧西尾病院）から、大磯東海大学病院に入院され一時は生死をさまよわれキレイナ花園を見て、引き返したとか、言語障害が残る様子と奥様の話であった。驚いたがまあよかった。すばらしい歌人の岩田さん又きれいな歌を作られることを会員一同お待ちしております。これは人ごとでない。

それからの話がおかしくなって、一体私達は極楽へゆけるだろうか、戦前戦後の苦勞に耐えて、生き残ったのだから、もち論行けるよ、という、極楽は現世では見ようがない。

まあどちらにしても残った生を大切に無理をしないで楽しく暮らしましょうと、ここまではよかったが話しは別の方向へ進んでしまった。

仏教に卓見をお持ちの中村、寺田さんの仏教談議が始まった。そして、人間の終末処理に及んだ。藤沢のお釜まは余りよくない、茅ヶ崎の方がよい、私はそんな遠くへ持って行かれちやいやだ、あの車は気に入らない私は車に酔っ払うからだめだ、死んだら酔っぱらないよ、それもそうだ。と真剣に考える。

いつれ皆んな避けては通れない問題^であるが、又来年も元気でよき日の鵠沼を語りましょう。

岩田さん、早く治って、会に出て下さい、遠いキレイナ花園を見た体験を聞かせて下さい。

おわり

平成元年12月20日に藤沢市と協力して。鶴沼公民館・鶴沼海岸郵便局・本鶴沼農業協同組合・鶴沼神明皇大神宮・鶴沼石上砥上公園にそれぞれ案内看板を配置しましたので文面を紹介しておきます。

◎鶴沼（くげぬま）

鶴沼は天平時代（735年頃）には「高座郡土甘郷」（砥上）と呼ばれていました。

又、この地に多くの「クグヒ」（白鳥の古名）が飛来したことがこの地名の由来といわれ、平安時代（1144年頃）には「鶴沼郷」、江戸時代（1841年頃）には「鶴沼村」久々比奴未牟良と呼ばれていたのが訛って現在の「クゲヌマ」になったとされています。

藤 沢 市

◎鶴沼海岸（くげぬまかいがん）

この辺りは明治20年頃に開発がはじまり、砂丘に道路をつけ松を植え、鶴沼館、対江館（中屋）、東屋といった旅館ができました。

そして、これらに徳富蘆花や志賀直哉、武者小路実篤、吉屋信子、芥川龍之介、などの小説家や大隈重信などの政治家が来遊したり、岸田劉生などの芸術家も住んでいました。

藤 沢 市

◎本鶴沼（ほんくげぬま）

本鶴沼の区域は昔、菊田、清水、原、大東、仲東、新田、堀川などの集落が点在する純農村地帯でした。

戦前、田は八部あたりにあり、残りは桃や麦畑で、戦時中はさつま芋畑になりました。

今でも別れ道には庚申塔や道祖神などが祀られています。

藤 沢 市

◎鶴沼神明（くげぬましんめい）

この地域は引地、上村、宮の前、清水、宿庭などの集落からなり、鳥森のお宮神明様、として親しまれている皇大神宮があります。

昔のくらはしは農業が主で、今の第一中学校あたりは一面に田がひろがり、おいしい米がとれたそうです。

藤 沢 市

◎石上（いしがみ）

鶴沼を中心とした一帯は天平時代（735年頃）には「高座郡土甘郷」と呼ばれ、鎌倉時代には「砥上が原」とよび西行法師や鴨長明も砥上が原の歌を残しています。

江戸時代に入ると江の島、大山詣の道筋で賑った石上船渡場があり、その北側に砥上地藏尊（1655）が建立されました。

この辺りの開発の祖の鎌倉武士を祀ったといわれる石上神社は度々水に浸り、昭和9年現在の地に移されました。

藤 沢 市 以 上

「鵠沼」平成2年1月9日号

よかったなあ・あの時代は

今 井 達夫

鵠沼の鵠生園 田中 まさ子

秋の懇親会 田中 まさ子

発行 鵠沼公民館

藤沢市鵠沼海岸2-10-34

電話33-2001

編集鵠沼を語る会代表

塩 沢 務

藤沢市鵠沼海岸3-12-33

電話36-7876